

blood news

今月のテーマ

血球計数器から出力される画像データについて”

10月3日より新しい血球計数器および新血液検査システムが稼働します。それに伴い、血球計数器より出力される赤血球粒度分布の画像データを臨床側に報告しようと考えています。最も有用な使用方法に、鉄欠乏性貧血の症例における鉄剤投与後のモニターがあり、その有用性について述べたいと思います。

鉄欠乏性貧血症例における、赤血球粒度分布の変化を図に示してあります。図中の波線が正常赤血球の波形です。初診時には、正常域より小さい領域に1本の釣鐘状の波形が見られ、典型的な鉄欠乏性貧血の波形（小球性赤血球の存在）を示しています。鉄剤を経口投与して一週間後には、新しく産生された赤血球が見られます（矢印）。赤血球の大きさは正常域に見られ、鉄がうまく利用されていることがわかります。二週間後には、正常赤血球の波形がさらに明瞭となり、鉄欠乏時の波形と合わせて新生された赤血球の2峰性の波形が出現します。検査データでは、Hb、鉄、フェリチンおよび網状赤血球の増加とMCVが上昇してきています。四週間後には、正常赤血球の波形が鉄欠乏時の波形よりもさらに高くなり、正常赤血球が優位になってきていることがわかります。このように、経時的に赤血球粒度分布をみることでより鉄の反応状況が把握でき、鉄剤投与後のモニターとして有用です。

オーダ画面では、結果表示画面および時系列確認画面のRBC項目横のアスターリスクをク

blood news

クリックすると、赤血球粒度分布の時系列画面が10月3日(月曜日)より表示されるよう設計準備中です。

